

横田教育文化事業 市制 60 周年記念 平成 26 年度江南市横田教育文化事業弁論大会



～私の「将来の夢」を語る～ 入賞者決まる

市では、教育文化の振興を図るため、名誉市民で文化勲章を受賞された、故横田喜三郎氏の意向に基づき、この事業を実施しています。

今年も中学生、高校生の向学心の高揚と豊かな人格形成を図ることを目的に「将来の夢」と題して作文を募集したところ、中学生の部に1193点、高校生に821点の作品が寄せられました。その中で、第一次審査で選考された優秀作文により、平成26年11月1日(土)市民文化会館小ホールで発表形式の弁論大会を行いました。

どの生徒の発表も現実を直視した上で、自分の将来の夢に想いをはせ、「夢」への実現のため具体的な目標の設定と決意にあふれた、会場の一人ひとりの心に響く、力強い発表でした。

論旨、論調・態度について審査がされ、次の皆さんが入賞作品として選ばれました。

ここに、その審査結果と各部の最優秀作品を紹介します。(敬称略)

中学生の部
最優秀賞：緒方美乃里(布袋中)

優秀賞：及部遥果(北部中)、平谷理人(宮田中)、蔵下望羽(宮田中)

優良賞：平井涼子(滝中)、永縄由帆(西部中)、社本妃奈美(布袋中)、脇田日向(西部中)、門松咲南(滝中)、百瀬賢吾(北部中)、後藤千汰(古知野中)、河井かのこ(古知野中)

高校生の部
最優秀賞：浅井結実(滝高)

優秀賞：小川るるな(滝高)、石川実歩(尾北高)

優良賞：篠田紗希(古知野高)、池田奈穂(江南高)、越野彩乃(尾北高)、舟橋輝恒(江南高)、山内菜摘(古知野高)

問合せ 教育課(内線394)



「太くたくましい根になるために」
緒方美乃里さん
(布袋中)

[JA8331, Kansai Approach, Say Attitude]

[JA8730, Tokyo Approach, Radar Contact, 10Miles South of AMI]

英語もよく知らない小学六年だった私は、聞き慣れないこれらの言葉を初めて耳にした。そのとき、なぜかこのような言葉で展開される世界にひとめぼれならぬ、ひと耳はれをした。そして私の夢が始まったのである。それは、ある職業とそれに没頭する一人の女性を描いたドラマからだった。「航空管制官」という職業。「航空業界」という、知っているようで知らない、想像もつかない世界。私は、幼い頃から何度も、父の故郷である鹿児島へ飛行機で帰省していた。だから、飛行機は比較的身近な乗り物であった。しかし、いつの頃からか、私は飛行機に乗るのが大の苦手になってしまっ

た。飛行機を怖い物だと勝手に決めつけてしまったのである。乗る直前になると、自然にガタガタと身体が震えてきてしまう。

そんな私が、航空業界を描いたドラマを見始めたのは、航空機を作る会社に勤める父と祖父の影響が大きい。特に、元航空自衛官の父からは、小さい時から耳にタコができるほど飛行機の話や聞こえられた。父は、日頃特に趣味もないように見えるけれど、飛行機についてはとても詳しい。なぜ飛べるのか、どんな仕組みになっているのか。そしてそれらのことについて語っているとき、父はまぶしい。そう感じて以来、自分も次第にそんな飛行機に魅せられるようになった。

そんなこともあつて、今年の春。私は、修学旅行で羽田空港の整備工場見学を希望した。そこでは整備士さんたちが一生懸命飛行機のメンテナンスをしていた。整備工場に入つて、一番目に飛び込んできた巨大な機体の姿。そして、その巨大な機体を前に、汗水たらして真剣に整備する姿。そんな大きさと、真剣なまなざしに吸い込まれていくようだった。印象に残つた整備士さんの言葉。

「少しでも完璧な状態にして飛ばせてやりたい。」
それが整備士のモットーなのだそう。それには、整備士さんの飛行機に真摯に向き合つ熱い思いを感じた。

それは、整備士だけではなく飛行機を作る父も同じだった。飛行機の外側の表面にはほんの小さな傷も、一ミリのずれ

も許されない。常に神経を最高に集中させてという、気のめいる作業をすべて飛行機を安全に飛ばすために使っていることだった。それには、丁寧に飛行機を仕上げていく魂を感じた。メンテナンスをする整備士と飛行機を製造する父。立場は違うが思いは同じだった。こういう人達の手で作られているのが飛行機なのだと感じた。そんな一つ一つの心遣いがあるからこそ日本の航空機が信頼されているのだと分かった。自分も空の安全を守る一員になりたい、航空機に的確な指示と情報を提供できる、信頼される航空管制官になりたい。そんな思いをより強くした。

これだけの思いを持つて作られ、これだけ技術が進歩した現在でもバードストライクやエンジントラブルのニュースを時折耳にする。それらは最先端の技術で回避されるようになっていく。しかしこれらの技術が最大にその力を発揮できるように、人間の力が必要になってくる。迅速な思考と冷静な判断力。そしてチームワークで乗り切っていく力。その力があつてこそ安全が確保される。

これらの力は、私が中学に入学してからこの夏まで全力を掛けて頑張ってきたバスケットボールに似ている。ボールの行く先と相手の行動を迅速に読み、どのルートでボールを持つていけばゴールまでのラインが作れるかを判断する。そしてチームの力を何よりも信じる。私はバスケットボールがそれほど上手にはなれなかつたけれど、この二年半の部活の中

で、そんな大切なことをたくさん学んできた。

詩人、相田みつをさんの詩の中にこういう一節がある。

「花を支える枝 枝を支える幹 幹を支える根 根はみえねんだなあ」
→ 相田みつを著『にんげんだもの』（文化出版局）より



世の中には、この「根」の仕事がたくさんあるが、航空管制官も同じだと思う。そして飛行機が空を飛ぶまでに携わつた人全員の思い。私はそんな思いのこもつた快適と安全という花を支える、太くたくましい根になりたい。そして十年後の自分の「航空管制官」という夢の花のために、これからの私は、根づくりに忙しくなるのだ。人に信頼される豊かな知識と、いつも万全の体調で働ける体力を作つていきたい。長い道のりではあるが、ようやく見つけたこの強い思いを、決してあきらめない。



「生物学から考える社会問題」
浅井結実さん
(滝高)

私は将来、生物、特に生体内の化学反応について学び、それを活かして社会貢献したいと考える。

特に今興味がある分野は代謝だ。代謝というのは呼吸に代表される反応系で、高分子化合物を二酸化炭素と水に分解してエネルギーを取り出す複雑な反応である。たとえばヒトは、細胞内にあるミトコンドリアで食物から取り込んだデンプンを分解することでエネルギーを得ている。これが代謝である。

代謝に興味を持つたきっかけは高校の化学の授業だ。生物で初めて代謝の話を知ったときはさして興味はなく、教科書をそのまま暗記しただけだった。しかしその後化学を勉強したときに、代謝がどれほどすごいのかを痛感した。

化学の授業でいろいろな化合物の製法を習ったとき、五百度で反応させたり、専用の炉を用いたり、と大がかりな装置が多く見受けられた。一般に化学反応というものは、高温もしくは高圧の状態が起こるものが多い。また人為的には、不純物が混ざつたり途中で反応が止まってしまうたりするので、反応を思い通りに進

めることは難しい。私はそのことを習ったとき、それならば何故代謝は体内できちんと起こるのだろうか、と疑問を持った。化学の法則を当てはめると絶対上手くいきそうにないからだ。「ごはんを食べればエネルギーが得られる」という当たり前のことが、急に不思議に思えた。

この疑問を先生に尋ねると、それは酵素がはたらくているからだ、と教えてくださった。酵素というのは触媒として、反応を進める助けとなる物質だ。ヒトの体内はもちろん高温でも高圧でもないが、多数の酵素が関与しているおかげで反応系が機能し、必要なエネルギーを確保できている。酵素には、電子を単離するなどの、人為では不可能なことが可能なのだ。現代の発達したテクノロジでも解明しきれないことが、酵素によつて人類が誕生した時からずっと続けられているのである。

酵素の代謝におけるはたらきを知つて、習つたばかりのときは何の疑いもなく丸暗記していたことは、これほどすごいことだったのか、と衝撃を受けた。それから代謝に興味を持つようになった。もし代謝が今よりも安価で容易に再現できるようになれば、エネルギー供給の大きな助けになるだろうと私は考えている。日本では東日本大震災後、原子力発電所の稼働は全面的に停止し、以前にも増して節電が叫ばれるようになった。世界全体を見ても、人口は増加し続け先日七十億人を突破した。特に発展途上国では、電力が行き渡っていない地域も多い。

エネルギー不足は世界が抱える課題であると言える。しかし温暖化や環境汚染はなるべく進行させたくないのだ。今求められているのは、クリーンで安全なエネルギー供給手段だ。

とても難しい課題だが、これを生物学が解決できるかもしれない。それは代謝で発生するエネルギーを、電気に変換して利用するという方法だ。代謝は前述したように、高温・高圧条件を必要としない。エネルギーを生み出す元となるエネルギーが火力発電などより少なくて済むので、従来よりも効率的である。また原子力発電のような事故の心配もなく、安全な発電手段である。



実際に、微生物による代謝を使って発電する「微生物燃料電池」というものの研究が行なわれている。微生物に工サとなる有機物を与え、それを分解するときに発生するエネルギーを電気として用いる小さな発電機だ。

しかし、これはまだ研究段階であり、実用化はされていない。研究が始まったばかりであり、また、微生物を扱う関係で大規模で行うのが難しいからだ。

これの実用化のために研究を進めていくのはもちろんであるが、私は代謝そのものを組み込んだ発電というものを実現させたい。電池の中にいる微生物に発電をさせるのでなく、擬似的な代謝反応を組み込んでそこからエネルギーを取り出す、ということだ。動物と同じ仕組みの発電である。もしこれが実現すれば、ごはんを食べるロボットも登場するかもしれない。

私は大学で生物学を学び、それを活かして生物による発電をぜひ実現したい。先進国と発展途上国が混在し、このあとも発展を続けると予想される現在の世界のニーズにあつた発電だ。実現すれば必ず社会の役に立つであろう。代謝は、どんな反応か分かつていても酵素なしでは再現できないことが多い分野である。原理の解明とともに、研究を如何に実生活に生かすかも学んで、社会に貢献していきたい。

特別発表

昨年度に引き続き、平成26年度においても、福島県相馬市の中学生3人を招待し、同年代の声を聴きました。その3作品を紹介します。

「輝く未来へ」

土屋颯斗さん(相馬市立玉野中3年)

「多くの人々が同じ希望を持ち、共に歩んでいけば、その希望はきっと実現するはず」これは、昨年、郡山で開かれた「再

生可能エネルギー教育成果発表会」での、玉野中学校の発表原稿の一部です。

昨年度、僕たちは「再生可能エネルギー教育」のモデル校に選ばれ、学習を進めてきました。再生可能エネルギーは、自然の力を利用しており、二酸化炭素を出しません。半永久的に利用でき、温暖化対策としても期待されています。



震災直後の玉野地区では、原子力発電所の事故による放射性物質の影響で、農作物などを作ることができませんでした。少しずつよくなるはなっていますが、未だに厳しい状況です。ですから、モデル校に選ばれたと聞いたときには、「僕たちが学ばなければ」と、使命感のようなものが生まれてきました。けれど、それと同時に、たつた十二人の学校で学習をして、何の役に立つのだろうか、という思いもありました。

そのような中、僕たちは研究を進めていきました。調べ学習だけでなく、東北電力の方々に来ていただき、実験を行うこともできました。また、再生可能エネルギーの関連施設。時には、いわき市まで行き、明星大学で、講義を受けたり、

実際に太陽光パネルを設置している中学校を見学したりもしました。

相馬復興会議、再生可能エネルギー教育成果発表会など、研究の成果を発表する機会もあり、再生可能エネルギーについて知らない人にも、興味を持ってもらうことができました。風力発電や水力発電など、相馬や福島の特徴を生かしたエネルギーについて、多くの提案があり、僕たちと同じように学習している小中学生、高校生に出会うこともできました。最初は、たった十二人だけだと思っていたのに、僕たちには、たくさん仲間がいたのです。

研究を通して、再生可能エネルギーには、メリットだけではなく、多額の資金が必要だというデメリットもあることがわかりました。他にも、維持費の問題や、安定した供給が難しいという課題もあります。

そこで、皆さんに提案があります。エネルギーを作るだけでなく、無駄なエネルギーを省く、「省エネ」を進めていきましょう。「節電」「節水」など、資源の削減なら、僕たちだって、いくらでもできます。

その証拠に、玉野中学校は昨年度、温暖化対策の推進を目的とした「福島議定書事業」で、最優秀賞をいただくことができました。これは「平成二十二年度に比べて、電気使用料を三パーセント削減する」という、目標を達成するため、学校全体が一丸となり、「節電」に取り組んだ結果だと思えます。

皆さんの学校では、誰もいない教室の電気がついたままになっていませんか。家庭では、クーラーの設定温度、何度にしていきますか。東北電力の方のお話によると、二十八度で十分だそうです。また、窓から風を入れたり、うちわを使ったりなど、昔ながらの方法もいいと思います。学校でのが渴いたとき、冷たい水が出てくるまで、水道の水を流したままにしていますか。そんなときは、水入りの冷たい水を、水筒に入れて、持ってきてはどうでしょうか。

こうして、一日の生活を振り返ると、きつと「省エネ」ポイントがたくさん見つかるはずです。その、一つ一つの小さな行為を積み重ね、僕たちの力で、地球のエネルギー問題に、立ち向かいます。

今回の学習で、福島の未来を考えているたくさんの人々に出会いました。原発問題や地球温暖化のことだけではありません。放射線の対策、防災への取り組み、農業、漁業の復興、全部一緒です。一人の力が小さければ、みんなが力を傾ければいい。多くの人々が同じ希望を持ち、共に歩んでいけば、その希望はきつと実現するはずです。そして、それが僕たちの相馬、福島、そして地球を、未来へつなく、かけはしとなるでしょう。

「ついでに言葉」

北畑愛叶さん

(相馬市立中村第一中3年)

「愛叶、言葉の使い方、気をつけなさい。」

私は、母に、こう言われて叱られることがよくありました。

確かに、自分自身では良い言葉を選んで話しているつもりなのに、私の言葉が原因で友達とケンカしてしまったり、相手を不愉快にさせてしまったりしたこともあります。自分が思っているより、私は言葉の使い方が下手なかな、と悩んだこともありました。

でも私は、言葉を使うこと、つまりお話をすることが大好きです。友達とのしゃべりは今の生活の中で一番の楽しみだし、他愛もないような言葉のやり取りで、仲間との絆が強くなっていくのを感じられる瞬間は、何事にも変えがたい喜びでもあるからです。

こう考えてみると、普段何気なく使っているこの「言葉」というツールは、「もろ刃の剣」のようなものだと言えます。周りとのコミュニケーションのために絶対不可欠なとても便利なものである反面、使い方によっては相手を傷つけてしまう恐ろしい道具にもなります。つまり、「言葉」そのものが持っている意味に加えて、使う人がその「言葉」をどう扱い、相手にどのように伝えるのか、それが、とても大切なのだと思います。

例えば「ありがとう」という言葉。感謝の気持ちを表すこの言葉は、美しい日本語の代表のような言葉ですよ。笑顔で「ありがとう」とお辞儀をされたら、だれもがいい気持ちになり、またがんばろうと思ってくれるでしょう。

しかし、同じ「ありがとう」でも、そっ

ぽを向いて不機嫌そうに、「ありがとう」とつぶやかれたとすればどうでしょうか。自分のしたことが悪いことのように感じられ、嫌な気持ちになってしまうのではないのでしょうか。

「おはようございます。」

私は生徒会の役員として「朝のあいさつ運動」に取り組んでいます。このあいさつも人それぞれです。明るく元気に「おはようございます。」と返してくれる人もいれば、下を向いたまま小さな声で「おはようございます。」という感じの人もいます。

このように、同じ言葉でも、使い方や使う人によって、またそれを使うシチュエーションによって、さまざまな姿に変わってしまう。そこが「言葉」の面白い面とも言えるのですが、気をつけて使わないと、誤解を生むものにもなっています。



「お母さんが言っていた『言葉の使い方』ってこういうことなんだ。」

このことに気がついてから、私は「言葉」そのものだけでなく、表情や態度にも気をつけるようになりました。すると、

親とのケンカもなくなり、友達との衝突も少なくなりました。また、それまではなかなか話すことができなかった人たちともおしゃべりができるようになり、友人と呼べる人が増えて行きました。

「言葉の力」と、よく耳にしますが、「言葉」を使うのは私たち人間です。「言葉」そのものが持つ力をどう生かし、どう伝えるのかは私たち自身の力にかかっています。□先だけだけでなく「心で伝える言葉」。それが、聞いた人の心を動かす、本当の意味で「力ある言葉」なのではないでしょうか。

私には一つ、使い方がよくわからない言葉があります。それは「復興」という言葉。あの震災以降、日本が一丸となつてがんばるためのスローガンとして、「絆」という言葉と共に毎日のように新聞やテレビで目にし、耳にしてきた言葉です。

震災から三年が過ぎ、道路や建物の整備は進んでいます。それは「復旧」です。「復興」とは、人々の「心」が震災以前の状態に戻る事です。だとすれば、私たち自身が、「心で伝える言葉」で、本当の相馬の姿をアピールし続けることが「復興」を加速させるのではないのでしょうか。そして、「復興」という言葉が使われなくなった時にこそ、「復興」を成し遂げたと言えるのだと思います。



「言葉の境界線」

佐藤亜海さん

(相馬市立中村第二中3年)

「このプリント配ってくれる？」
先生が近くにいる生徒に頼んでいます。その生徒は先生に向かって

「え、なんで？」
と平気で先生に言葉を返してしまっています。頼まれると、どうして私なの？僕ばかり？と口に出して言う人もいます。

なぜ目上の人に対してそういう言い方ができるのか私には分かりません。面倒くさいという気持ちからでてるのでしょうか、それとも単に思ったことを言葉に出しただけのことなのでしょうか。

日常生活の中で、このような場面をたくさん目にしてきました。タメ口や暴言、文句や野次。最近のニュースでも議員が議会の中で飛ばした野次、国会議員の一言で県民が不愉快になったことなど、学校生活に限らずいろいろなところで問題になっていきます。

やりたくないこと、面倒なことがあるとそれをすぐに口に出してしまったり、自分の感情のままに思ったことを言葉にしてしまつのは周りで聞いている人がとても不愉快になります。

中学生の時期は、大人になる成長過程です。部活動で先輩と後輩の良い関係を築いていくには互いの言葉遣いが大切です。先輩が後輩を軽んじた言動もいけないことです。後輩が先輩に対してタメ口をきいてもいけません。先生と生徒の関係でもよくタメ口を耳にしますが、先

生は友達ではありません。尊敬の気持ちで接するべきだと思います。

先日、こんな場面を目にしたことがありました。授業前に廊下である先生が授業に必要なものを重そうに持つて教室に向かって歩いているときでした。

「先生、こんにち。荷物をお持ちします。」

その生徒は挨拶をするときに立ち止まり、会釈をしてから、先生に手を差し伸べました。教員ではなく、単に特別教室から自分の教室に戻る途中だったようでした。

傍で偶然にも目にした光景でした。私はその時、何とも言えない暖かいものを感じました。

「ありがとうございます。」その先生は、荷物を半分だけその生徒に預けました。私は大人の会話だなあと感じました。

先輩のことを「先輩」という言葉が付かず呼び捨てにしていますか？また、あまりにも身近にいるせいか先生といることを忘れて対等になってしまつてはいませんか？早く自分の言動や行動に気づいて下さい。あなたの言葉で相手はもてるん周りの人たちも不愉快になっていくかもしれません。感じ方は人によって違います。

私自身も勢いや感情に任せて先生に失礼なことを言うときもあります。友達にも嫌な口調で話するときもたくさんあります。でもそんな時に後で自分自身が嫌になり、落ち込むことがあります。あんなこと言わなきゃ良かった、もつとこんな

ふうには言えば良かった。相手の人はその一言で傷ついているのではないか、嫌な思いをしているのではないかと。

言っていることと悪いこと、言っている状況なのか、悪い状況なのか。私自身も反省する場面がたくさんあります。でも自分がいけないことを言ってしまったということに気づくことが一番重要なのです。



私たちの目に言葉は見えませんが、形として残らない、一瞬で消えてしまふものです。人としての境界線から越えるのではなく、その境界線を思いやりや気遣いの言葉でつくっていったらいいと思います。私たちが普段何気なく使っている言葉の中には、その人の心を感じる事ができるのです。人と良い関係を築くきっかけとして、もう一度言葉を見直して見て下さい。

良い人間関係は言葉からです。

